北海道新聞　31年3月12日（朝刊・小樽後志/16面）

20年の節目 転換点に

専門家ら3氏に聞く

マイカル小樽として開業してから、11日で20周年を迎えたウイングベイ小樽。節目の2019年を再建元年と位置付け、体験型施設の充実を図りながら収益の改善を目指す。学識経験者とテナント代表、消費者から課題や要望を聞いた。

（西出真一朗、谷本雄也）

近藤公彦・樽商大副学長

外国人客取り込み急げ

小樽商科大副学長の近藤公彦教授(57)＝マーケティング＝は「どんな人にどんなものを売るのか、施設のコンセプトを再構築し、統一的な方向性を打ち出す必要がある」と指摘する。

近年はアマゾンなどネット通販が台頭。日本だけではなく米国でも郊外型商業施設が大きな影響を受けている。「ネット通販が便利になる中、体験やサービスなど施設に足を運ぶ動機が重要だ」と強調。「ただ統一感なく店をそろえるだけでは、『何でもあるけど欲しい物はない』となって消費意欲が上がらない」という。

課題として外国人観光客の取り込みを挙げ、日本文化体験や外国人向け映画の上映を提案する。「ウイングベイがなければ、さらに札幌圏に消費が流れていたかもしれない。ウイングベイを核に、周辺施設との連携もできるはず。まだ伸びしろはあり、20年の節目が転換点になれば」と話す。

テナント4店運営の森熊秀夫さん

市内催しとの連動課題

ウイングベイでそば店など飲食店4店舗を運営する小樽フードシステムの森熊秀夫社長(69)は「小樽の発展のため、ウイングベイからまちづくりを発信できるよう頑張りたい。まずは正式なテナント会を組織し、各店舗がまちづくりに参画する努力が必要だ」と強調する。

花火大会や巨大クリスマスツリー設置など、かつてウイングベイで行っていた集客イベントは、ほとんどなくなった。「潮まつりや雪あかりの路など、小樽の催しと連動できていない。潮まつりで踊り子やみこしが館内を練り歩くようになってほしい」と願う。

来館者は増えており「今は市民に不可欠」と思っている。「平面駐車場やベンチもあり、女性と高齢者に優しい施設なのが特徴。福祉重視の商業施設を目指し、高齢者らの憩いの場にするよう働きかけたい。それが小樽への恩返しにもなる」と話した。

小樽消費者協の星功会長

高齢者向けイベントを

小樽消費者協会の星功会長(77)は「交通インフラの整備が必要」とウイングベイへのアクセス向上を望む。ウイングベイを発着するバスは、1時間に1本も運行がない路線もある。「公共交通機関の充実は重要。バスの本数はもっとあってよい」と指摘する。

ウイングベイ周辺には病院があり、高齢者の姿も多い。「子供を遊ばせるコーナーで高齢者が孫と遊んでいる風景をよく見る」という。「空き店舗を使い、高齢者向けのカルチャースクールや詐欺防止の啓発といった取り組みができるようにしてほしい」と求める。

周辺には小樽港勝納埠頭があり、毎年多くのクルーズ客船が入港する。「ニセコ地区に滞在している外国人も買い物に来ている。小樽駅や小樽港でウイングベイについて知らせたり、外国語のできる従業員を増やしたり、もっと外国人対応も充実させた方が良い」と助言した。

毎日新聞　31年3月10日（北海道/24面）

最先端の技術凝縮

小樽駅

JR札幌駅から電車に乗り込み約30分。色とりどりのリュックを背負った大勢の観光客が降り立った。道内でも指折りの観光地・小樽の玄関口である小樽駅は、1日約9400人が利用し、JR北海道の中でも7番目に乗降客の多い駅だ。レトロなランプが輝き、吹き抜けのホールがモダンな駅舎は、当時の最先端の建築技術で建設され、2006年、国の登録有形文化財となった。【源馬のぞみ】

北の至宝　道内の文化財を訪ねて

地形の高低差利用

小樽駅3代目となる現駅舎は、運河や港町があり、ゆるやかな下り坂が続く北側を向く。背後には小高い丘がせまり、駅正面からは眺めると、丘の上に建つ家々が駅の上に乗っているように見える。

茶色のタイル貼りの駅舎は左右対称となるようにデザインされ、直線的な四角い形が印象的だ。小樽駅より2年早い1932年に完成したJR上野駅（東京都台東区）と似ていると言われ、当時流行していた様式だという。北海道職業能力開発大学校の駒木定正特別顧問（建築史）は「コンクリート造りという新しい技術を使って造った四角い形の駅舎としては、東京以北で初めて」と話す。

駅に入ると大きなホールがあり、まず目に入るのが吹き抜けの高い天井と、きらびやかに輝く北一硝子製造の333個のランプだ。

こうしたホールは、小樽駅に先駆けて建てられたJR横浜駅（横浜市）などでも採用され、昭和初期の特徴的なスタイルという。

改札口から2階にあるプラットホームへは地下コンコースを通り、階段やエスカレーターで上がる。裏側に丘が迫る地形を生かし、高低差を利用した構造だ。今では渋滞防止のため地上駅を高架駅に切り替えることも多いが、ホームやレールを2階部分に持ち上げるには高い技術と費用が必要だ。小樽駅が建設された頃は2階建ては全国的にも珍しく、当時の先進的な建築技術をいち早く取り入れた建造物といえる。

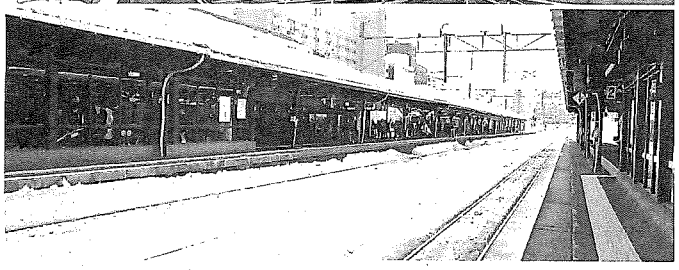
また、プラットホームは昭和の薫りを漂わせる観光スポットの一つでもある。建設当時にあった駅名看板や列車の到着を知らせる「むかい鐘」が飾られ、明治期に輸入したレールをプラットホームの柱として使うなど昔の趣を伝えている。小樽で幼少期を過ごした故石原裕次郎氏が78年に降り立ったことで「裕次郎ホーム」と名付けられた四番線には、石原氏の等身大パネルが設置され、記念撮影スポットとして人気だ。

小樽は道内の鉄路発祥の街。1882年、港と産炭地を結ぶために設けられた幌内鉄道が手宮（小樽市）―幌内（三笠市）間で全通。道内で初めての鉄道敷設となった。小樽駅は長く道南と道北を結ぶターミナル駅でもあった。

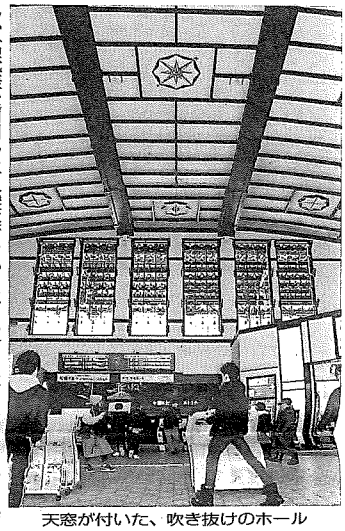
小樽駅にはさまざまな文化人が通り過ぎていった。詩人の石川啄木（1886～1912年）もその一人。啄木の姉の夫、山本千三郎は初代小樽駅（当時は中央小樽駅）長で、啄木は姉夫婦を頼って小樽を訪ねたり、短期間、小樽日報の記者として勤務したりするなど小樽はゆかりのある地だった。小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）出身の文学者、小林多喜二や伊藤整らも駅を利用していたという。鉄道が小樽の商業を発達させ、さらには文化が花開く街に育て上げた。

◆国登録有形文化財「JR小樽駅本屋」「同駅プラットホーム」

本屋、プラットホームとも1934年建造。道内初の鉄筋コンクリート造り（RC）の駅舎。土地の高低差を利用した高架化や中央部にトップライト（採光窓）が付いた吹き抜けのホールなど、近代的な建築様式や斬新なデザインが特徴。プラットホームは長さ118㍍、幅7.7㍍。



↑小樽駅全景　↓2階部分に設けられたプラットホーム＝いずれも小樽市稲穂2で



天窓が付いた、吹き抜けのホール

広く楽しめる場所に

52代目の現小樽駅長

木原昌良さん（59）

木原昌良小樽駅長＝小樽市稲穂で

52代目の現小樽駅長、木原昌良さん（59）は小樽市出身。駅には子どものころから親しみ、小樽への思い入れは人一倍だ。国鉄に入社後、東京や大阪での勤務を経験し、小樽の知名度の高さを実感。文化財である小樽駅の魅力を継承するとともに「駅を小樽の、さらには後志地方の観光拠点としたい」と意気込む。

小樽駅では、駅を舞台に楽しい体験を提供しようと、コンサートを開くなどさまざまな取り組みを進めてきた。毎年恒例の「小樽駅感謝祭」では昨年、小樽水族館の開館60周年を記念して駅に移動水族館を設け、好評を博した。

だが、木原さんは「できることはまだまだある」という。文化財としての小樽駅を知るツアーや、後志地方の農家から仕入れた農作物の即売会など、道の駅のような機能も持たせられればより活気づくと期待する。「楽しんでいただける駅作りを進めたい」と目を輝かせた。【源馬のぞみ】

北海道新聞　31年3月9日（朝刊・小樽後志/14面）

◆13日に商店街テーマに公開講座

「商店街のひとに学ぶ」というテーマで小樽商科大グローカル戦略推進センターが主催する公開講座が13日午後6時半から、小樽の稲穂二丁目会館（稲穂2）で開かれる。

小樽商大の学生たちが地域に学ぶプロジェクトの第3弾で、今回は都通り商店街振興組合の鈴木創理事長が都通りの歴史や現況を講演。鈴木理事長らが商店街の今後を語り合うパネルディスカッションも行う。

定員60人で、参加無料。問い合わせは同センター☎0134・27・5482へ。